



# 万国外科学会（ISS/SIC） 日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部  
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区溝口3-8-3  
帝京大学医学部附属溝口病院外科  
TEL: 044-844-3333(内線3223) FAX: 044-844-3222  
発行者：山川達郎  
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫(埼玉医大総合医療センター外科)  
E-mail: 03nmura@saitama-med.ac.jp  
印刷：株式会社 dig TEL: 03-3551-3060  
年2回発行1995年4月創刊

## 万国外科学会 会員の皆様へ

万国外科学会  
日本支部長  
**山川 達郎**

(帝京大学医学部名誉教授、  
帝京大学溝口病院外科客員教授)



万国外科学会会員の皆様には、お変わりなくご清祥の事とお慶び申し上げます。

### 1. ISS/SIC Congressの行方

2000年のBrussel Congressの直後に行われた第12回の本会での決定事項、すなわちオーストラリアが2009年の主催国に決定した経緯を明確にする為に、新President-elect, Sir Peter John Morrisに手紙を出しました。現在までのところ、ご返事をいただいておりませんが、十分に我々日本支部会の不満は通じているものと思われます。説明しにくい問題があったのかもしれません、その反省が前回のBrussel Congressで報告された主催国決定に関する規約の改定にあったのではないかと考えられます。President-elect, Professor J. Rudiger Siewertは、最近のnewsletterで、21世紀のISS/SIC Congressは、多数の参加者を得るためにも、現在、smoothな運営が営まれているIAESとの関係にみるごとき協調性を他学会とも確立して、幅広い見地から、全ての外科医が興味をもつ臨床あるいは研究テーマや高度な教育的なプログラムを盛り沢山に、それもISS/SICが主導権をにぎって企画して、学問的にも、より格調の高い集会でなければならないことを強調されています。また開催地の決定に関しましても、観光的な興味で決められるべきではなく、参加者にとって便利な都市を選択すべきであるとも申されております。学会の成功は数多くの参加者があつて初めてなしとげられるものでありますから、この考え方方は、この経済不況にある時代に促した考え方であると思います。さらに主催国にはそれなりのbackgroundがなければ開催は困難でありますので、主催できる国は限られます。したがって現状では、ISS/SICの開催は、早く2011年ということになりますが、この次期が早められる可能性は否定できません。いつ何時、日本の支援が要求されるかわかりませんので、そんな時に備えて、これからも日本支部会の力を更に強力なものとするための努力を引き続き行なうことを考えています。

### 2. 会員名簿の整理

会員名簿を見てみると、本会の為に長く貢献され、十分にsenior memberになられる資格を有しながら、いまだに会費の納入を続けて下さつておられる日本外科学会を代表される先生方がおられます。支部会は、そのような先生方には、ご希望によりsenior memberへの昇格の申請を本部にさせていただきたいと考えています。2001年には、林四郎先生と島津盛一先生、また2002年には駿河敬次郎先生、城所 伸先生、高井信一郎先生がsenior memberに昇格になりました。一方、学会本部から、会費未納者名簿が送られておりまして、日本支部会として、その旨を会費未納会員にお知らせ致しましたが、未だご返事いただけない会員がおられます。senior memberに昇格するにしても、また退会するにしても、学会本部からは会誌が送られておりまして、会費を請求してくれるようとの要請が日本支部にきています。どうかその点をお汲み取りいただき、年会費のお支払いになられる時には、ご退会、senior memberご昇格などのお考えがある場合には、その意思表明を明確にしていただきたいと思います。また退会の場合には、今までと同様、若い先生のご紹介をいただければと思っています。

### 3. 年会費の支払い方法

1年前より、年会費の支払い法が変わりました。すなわち学会本部に会員の先生に日本支部会費のUS\$40.00を含み、US\$160.00を請求していただき、年会費の内の日本支部会費を日本支部に返金していただく方法を、アメリカ支部などに習い、とらせていただきました。現在までのところ正確、スムーズに履行されていますが、同時に、前述した未納者名簿も送られてきました。今年は、年会費未納会員には日本支部に送金していただき、日本支部会費を引いた年会費を学会本部に送金いたしましたが、前述したような規則がありますので、その年までの会費をお払いいただいた上で、退会などの意思表示をしていただきたく存じます。よろしくお願い致します。

### 4. 野口志郎先生がIAES会長を務められるISS/SIC, 2003について

ISS/SIC2003は、来年の8月24-28日、ThailandのBangkokにおいて開催されます。殊に、今回の学会では、member societyの一つであるIAESの会長を別府市の野口記念会、野口病院の野口志郎先生がお務めになります。心よりお祝い申し上げると同時に、これはISS/SIC日本支部会会員にとっても誇りでもあります。日本支部会の力を示す絶好の機会であると理解して、野口会長を日本支部会としてご支援申し上げたいと考えています。また、この貴重な機会を利用させていただき、日本にISS/SIC Congressを近い将来、招致する息吹が今尚、息づいていることをアピールしたいと考えています。アジアの学会でもあり、数多くのご友人を持たれている会員も多いことと存じます。友好を温めるためにも、絶好の機会ととらえられ、是非とも多くの会員が参加されることを期待しています。

## 理事挨拶

### 100周年記念誌のご案内

万国外科学会理事  
**比企 能樹**  
(北里大学名誉教授)



本来なら、3月に定例の理事会が開催されるはずであったが、経済的な負担やその他の手筈から、総会の無い年の理事会開催はより多くの理事が出席する秋に行われるACS等いずれかの学会の際に行おうということに変更になった。

従って理事会報告がないので、今回は昨年ISS/SIC本部より出版された、100周年記念誌“ A Century of International Progress and Tradition in Surgery” の紹介をしたいと思う。

青い布表紙の分厚い本は、この万国外科学会の100年間という歴史と、この本を一人ごつごつと編集した Dorothea Libermann-Meffert の努力が手に重みを増す。彼女は München 大学外科教授でありながら医史学に興味を持ち、当学会の記念誌編集を任されてからは、文字通り寝食を忘れて夫君と

共に情熱をこの一冊に注いだのである。

頭書には、当然のことながらこの学会の成り立ちから説きはじめる。1902年にベルギーの外科学会の提唱により、各国の外科学会に呼びかけて ISS が設立された推移が実に詳しく述べられている。世界の外科学会曙期を知るに絶好の書となり、ひとり当学会の歴史のみでは無い。

例えば、各国の外科学会の創設が表にまとめられ、古くは1843年のイギリス王立外科学会から、1872年のドイツ外科学会、など欧州につづいて、わが国の1899年日本外科学会も決して他と比して新しくはない。因みに American College of Surgeons は1913年の創立である。

創立後の1905年の会員数は637名で、その内3名の日本人会員を記録している。何よりも興味を引くのは数多くの写真である。例えば1932年の国際委員会出席者の集合写真には、わが国からの塙田教授や Sauerbruch, Grey-Turner など、一目でわかり、他の数多くの集合写真や記録の中に、有効な外科医達の顔を発見するのも興味深い。当学会の会長を日本人としてはじめて勤められた出月康夫教授ご夫妻の勇姿も拝見できる。

ISSの組織が詳しく述べられているが、これを脇に置くとしても圧巻は歴史に関する記述で、よくこのような資料が二つの大戦を経て保存されていたと驚く。

日本が ISS の継続に深くかかわった資料もスイスに保存されこの度公開された。第一回大戦後の1923年、この戦いによりドイツ、オーストリア及び

トルコがISSより除名を受けた。しかし、ドイツとオーストリアに医学を運んだ日本人会員で当時の日本外科学会の会長の三宅速教授が、これを遺憾として世界中の外科医にこれら3国のISS復帰を呼びかけ近藤治繁教授など12



ISS/SIC100周年記念大会にて（ブリュッセル）2001年8月28日  
比企理事と元事務総長Prof.Allgöwer, Prof.Libermann と夫人

### 特別寄稿

## ISS/SICとIAESのこと

野口病院 院長

**野口志郎**



私がISS/SICのactive memberに加えてもらったのは1982年の2月であったから20年間会員をしていくことになる。最初に学会に出席したのは1981年のスイスのMontreuxでの会であった。Integrated SocietyであるIAES（International Association of Endocrine Surgeons）には1979年に入っていたがその年にはどうしても時間の都合が付かずに残念ながら欠席した。Montreuxでは申し込みが遅れたのでホテルが無く困惑していたところ、会場のすぐ前のPalace Hotelに偶然にもキャンセルがあったとのことでそこに投宿することになった。宿泊代が高いのに驚いたが、この高級ホテルのかなり広い部屋に泊まることになった。それまでは安い宿にしか泊まったことがなかったので色々と失敗をしたが、あまり自慢できる事ではないのでここには書かない事にする。学会は大変興味深くその後に親友となった多くの仲間と知り合いになった。後にIAESの会長になったオーストラリアのProf. Thomas Reeve, サンフランシスコのProf. Orlo H. ClarkやフランスはLilleのProf. Charles Proyeなどがまだ若くOrloもCharlesもまだProfessorではなかった。

Orlo H. Clarkは私が1970年にCancer誌に発表した論文を読んでいて随分年配の人を想像していたようであった。「君はいくつの時にあの論文を書いたのか」と尋ねられて「11年前の論文だが僕は幾つに見えるかい」と逆に聞き返したのを覚えている。Prof. Norman Thompsonは非常に堂々としていて何處となく威厳があるように感じられ、近づきにくい感じがした。今考えてみると現在の私よりも随分若かったはずである。彼とはその後大変親しくなりISS/SIC以外の所でも一緒になる事が多く彼の人柄に感銘を受けることがたびたびあった。その後のパリの会では2つのOralを発表した。

私は英国から車でフランスを旅行した事があり、その時にメニューが読めなくて苦労をしたので、後に勉強してメニューは一通り読めるようになっていた。しかし、13年の歳月の間にメニューはフランス語ばかりでなく英語のものや日本語のものまであって折角の勉強も役立たなかった。その頃はフランス語会話も少し出来たので本場で通用するかどうか試して見たくてフランス語でものを尋ねたところ「英語が出来るか」との返事が返ってきたので大変悔しい思いをした。その後はシドニー、トロント、ストックホルム、香港、リスボン、アカブルコ、ウィーン、ブリュッセルと毎回出席して殆ど何か発表している。トロントの会では藤本教授がIAESの会長だったので私に宴会の司会をしろとの御下命があった。「私がそんな事をするのは筋が通りませんよ」といって逃れようとすると「世の中に筋が通った事などあるのかね」と言われてどうしても私にやれと言われ大変な苦労であった。シドニーの会ではProf. Thomas Reeveが後に彼の後継者になったLeigh Delbridgeを紹介してくれ、その後は彼とも肝胆相照らす仲になった。香港の会の時には後にMartin-Luther大学の教授になったHenning Dralleとも親しくなった。彼は私が尋ねた時には親切に良い忠告をしてくれるなかなか誠実なひとである。1999年6月にアメリカに行く事があった。その頃Orlo H. Clarkと一緒に本を編集していたので帰りにサンフランシスコに立ち寄った。彼に誘われるままに夕食をご馳走になりながら世間話を

名の日本人教授のサインと共に、声明書を添えて世界を回った。その内容は「学問が戦いや政治に左右されなければならない」という崇高な理念を盛り込んだ格調高いものである。同意書の中には米国のMayo兄弟の名もある。三宅速教授はこの声明書をもってスイスのISS本部にProf. De Quervain事務総長を訪ねて提出し、翌年の理事会において目出度く3国の復帰が叶ったという日本人の果した経緯が克明な資料と共に掲載されている。また、第二次大戦後、いち早くISSに参加した久留勝教授、前田友助教授などの記載ものこっている。

いずれにしても、このような大事業はLiebermann夫人の尽力があってこそ出来上がった。興味がある方は、ISSスイス事務局に申し込まれるとまだ在庫があるはずである。

A Century  
of  
International Progress  
and  
Tradition in Surgery



An Illustrated History of the  
International Society of Surgery\*

D. Liebermann-Meffert, H. White  
In collaboration with H.J. Stein, M. Feith and V. Bertschi



KADEN  
VERLAG HEIDELBERG

していた時の事である。私が「仕事は趣味ではないから、そろそろ引退して趣味でも楽しみたくなった。」と言うとOrloが急に「君、何を言うんだ、そんな事を軽々しく言うものではない。君は大事な人間なんだ」と言い出したので私がただ驚いていると「これはtop secretなんだから詳しく言えない。すぐに分かるよ、competitiveだからretire等と言う事は言うな」と言ってその話は打ち切りになった。私はその時は「まさか」と言う気持ちと「ひょっとして」と言う気持ちがしたが、帰国すると日常の雑事に忙殺されてすぐに忘却てしまった。ウィーンの学会のウエルカムパーティーの時である。帝京大の高見教授が「Hotel WiedermeyerでIAESの連中がワインパーティーをしているからそこに行こう」と言って、雨の中を無理に私を連れていた。ワインパーティーの場所はまるで満員電車の中のように混雑していた。人をかき分けながら中ほうに行くとDüsseldorfのProf. Hans Röherが「コングラシオン・ムシュー・プレジドン」とわざとフランス語で声をかけて右手を差し出しながら握手をした。ここで初めてOrloがサンフランシスコで言ったことの意味がわかった。次の日のビジネスミーティングでSecretary-Treasurerが次のPresident-electはと言って私の名を言うとその席にいた人々が拍手をして簡単に決まってしまった。私にしてみると何か狐につままれたような気分であった。ウィーンではIAESではなくOncologyのセッションの司会をおおせつかった。一人目が発表して時間を超過しそうだったのでかなり急いで貰ったのに5つの演題のうち2つは演者が現れなかつたので時間を持て余し最初の演者には大変失礼な事をしたと思い後悔した。IAESでは演者が現れなかつたという事がなかつたので会場に人が少ない事には気付いていたが演者が居ないことは気付かなかつた。ブリュッセルの会では私が正式にIAESのプレジデントになった。私はそんな立場になるとは考えた事がなかつたのでプレジデントがどんな事をすれば良いのか未だ良く分からぬのだが、プログラムの概要を1月中に作れとか様々な事を言ってくるので、専らSecretary-TreasurerのProf. Åkerströmに頼っている。



歴代の会長と共にWienにて 左から Prof. Orlo H Clark, Prof. Norman W Thompson, Prof. Emeritus Per-Ola Granburg, Prof. Charles A Proye, 小生, Prof. Jon Van Heerden, Prof. Emeritus Thomas S Reeve

多価・酵素阻害剤 指定医薬品、要指定医薬品<sup>(1)</sup>

**ミラクリット注射液**  
**MIRACLID Inj.** 25,000/50,000/100,000単位

一般名：ウリナスタチン

※「功能・効果」「用法・用量」「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。  
※(1)注冊第一種医薬品の方程式。税字により承認するごと。

健保適用

持田製薬株式会社  
東京都新宿区四谷1丁目7番地  
電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515



## 万国外科学会100周年記念講演を終えて

慶應義塾大学医学部長 外科学教室 教授  
北島 政樹

1世紀前にKocher教授によって創立された万国外科学会（World Congress of Surgery / International Surgical Week）は2001年に100周年を迎え、発祥の地、ベルギーのブリュッセル市で開催されました。

記念学会の半年位前にCongress PresidentのSievert教授および理事の比企能樹名誉教授より理事会でGrey Turner Memorial Lectureの演者に推薦されたという連絡をいただいた。

非常に名誉なことであったが、記念講演の詳細がわからず、早速インターネット等を駆使して情報の収集を行う事にした。

情報が集まるに従って、段々と緊張感と責任感が増してきたのは事実であった。

Grey Turner (1877-1951) は英国の外科学者であり、1933年 "Lancet" に食道癌のPullthrough法を始めて報告された。万国外科学会への貢献により、その後、記念講演が設立された。

現在までに20人が講演しているが21人目の栄誉を得たことになった。

第1回は1961年、Dublinにおいて英国のL.C Rogers先生が "The life and work of George Grey Turner" というタイトルで講演されたのが始まりである。11人目として1979年にGeorge Grey Turner先生の息子のE.Grey Turner先生が "This material age is beginning to realize that there was some good in the past" というタイトルで、San Franciscoで講演されている。偉大な父親の名前がついた記念講演をする息子にとってはどんな気持ちで望んだか興味がある。

その他、私のよく知っている演者として、T.E Starzl先生 (1987年、Sydney)、さらにJ.F Burkeハーバード大学名誉教授（日本外科学会名誉会員）の弟子で、私の兄弟

子ともいうべく、また昨年、ブリュッセルの本学会でSociety PresidentになったSir P.J Morrisが1993年にHong Kongで、1999年には乳癌のSentinel Node Navigation Surgeryでリーダーの一人であるV.Veronesi先生が1999年、Viennaで講演されており、本年11月に横浜で私が主催するThe Third International Congress of Sentinel Node Mappingでの再会とMemorial Lectureの思い出話をすることを今から楽しみにしている。

さて今まで私を含めて21人がこの大きな栄誉を担っているが、発祥の地である英国が8人と多く、それ以外、米国3人、スエーデン2人、ドイツ2人、香港2人、フランス1人、ポーランド1人、イタリー1人と日本人が1人の計21人となる。

指名を受けて以来、教室員と共に鋭意準備を進めてきたが、直前までプレゼンテーションの方法で事務局とやり取りが行われ、最後まで当方の希望しているPCプレゼンテーションが不可能と言う連絡であった。しかし、司会をして下さった、S.A.Wells Jr先生も心配してください、事務局に依頼してくださったのだろうか、やっと直前になって費用を負担すれば可能という連絡があり、ホッとしたわけである。しかし緊張感と共に準備をしていた矢先の7月10日、突然、教授会で医学部長に指名され、9月まで病院長と教授職と3職を同時にこなさなければならなくなってしまった。

人生60年間の中で講演の準備を含めて、このような忙しい時期を過ごした記憶はその前後にも思い当たらない。2台のコンピューター（6kg）を大学院生の菅沼君が背負ってブリュッセル入りしてくれた。

さて、2台のコンピューターを前日より会場に持ち込み、色々と準備が始まっ

た。準備に直接関与してくれたのは大谷講師、北川博士、菅沼君であり、私を含めて4人のテンションが明日の講演に向かって高まっていくのが肌で感じられた。

学会初日を迎えた。まず厳粛の中にもなごやかな雰囲気の中にOpening Ceremonyが行われ、いざ講演の開始時間となった。

不思議と落ち着いている自分が大きな会場の最前列に座っていられるのは、おそらく周囲に日本からの外科医あるいは慶大外科同門の先生方がたくさん参加されており、なごやかな雰囲気を醸しだしてくださったためであろう。

司会の労をおとり下さったS.A Wells先生が丁寧に私の履歴を長々と紹介してくださったのが印象的であった。

さあ、慶應義塾大学外科、いや日本外科学会の名誉の為にも失敗は許されない気持ちでまず、最初のスライドを要求した。

講演のタイトルは "Progress in GI Cancer Management : Challenges in the 21st Century" であり、まず塾祖、福沢諭吉先生と初代医学部長、北里柴三郎先生の医学に対する基本的理念および哲学を紹介した。さらに、教室の基礎研究から臨床成績について述べ、最後に21世紀のG I Cancerに対する治療をロボット手術やDNAチップを用いた癌遺伝子の解析を含め紹介した。これらの成績を基に、標準化治療から個別化治療への発展を予見し、第100回日本外科学会会长講演でも強調した、外科医のArt.Scienceに含めて、Humanityの重要性を示し、記念講演を終了した。

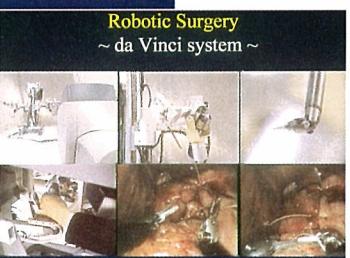
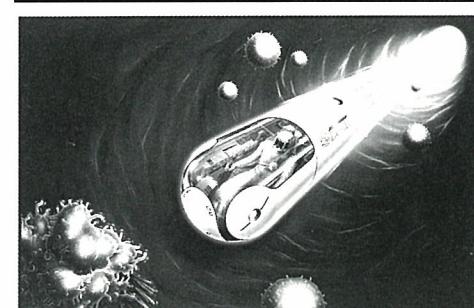
降壇する前から会場より万雷の拍手と賛辞を頂き、60年の人生の中で最良の日を迎えたという気持ちであった。

80数年の外科学教室の業績の一端を世界に示し、光輝ある伝統に傷をつけないで済んだという満足感と共に降壇した。

講演終了後、教室員の大谷、北川、菅沼三君とブリュッセルのイロ・サクレ地区、通称食い倒れ横丁に足を運び、テラス席が軒を連ねるレストランで飲んだベルギー地ビールと郷土料理の味は今も忘れられない思い出となっている。



Tele-mentor

Robotic Surgery  
~da Vinci system~

**フルツロン**®

薬価基準収載

抗悪性腫瘍剤(ドキシフルリジン製剤)

Furtulon® 5'-DFUR

(単独 薬価 フルツロン/カプセル100・カプセル200)

※ 効能・効果、用法・用量、警告・使用上の注意等は、製品添付文書をご覧下さい。

(資料請求先) Roche 日本ロシュ株式会社

〒105 東京都港区芝2-6-1

### 万国外科学会 第12回日本支部総会 出席者名簿

●2001.10.11 ●出席者27名 ●敬称略 五十音順

1 秋丸 球甫	15 高橋 俊雄
2 阿部 令彦	16 田中 雅夫
3 石川 浩一	17 中川原儀三
4 出月 康夫	18 野口 志郎
5 井上 一知	19 馬場 正三
6 冲永 功太	20 林 四郎
7 上西 紀夫	21 比企 能樹
8 北島 政樹	22 平山 廉三
9 北野 正剛	23 丸田 守人
10 酒井 滋	24 村田 宣夫
11 佐竹 克介	25 安富 正幸
12 白日 高歩	26 門田 守人
13 砂川 正勝	27 山川 達郎
14 炭山 嘉信	

### ◆2001年1月～12月までの入会者◆

青柳慶史朗 Aoyagi Keishiro	久留米大学医学部外科学教室
西田 俊朗 Nishida Toshiro	大阪大学大学院医学部外科学第一教室
蓮尾 公篤 Hasuo Kiatsu	横浜市立大学医学部第一外科学教室
若井 俊文 Wakai Toshifumi	新潟大学医学部第一外科学教室
塩谷 猛 Shioya Takeshi	日本医科大学附属第二病院消化器病センター
水谷 聰 Mizutani Satoshi	日本医科大学附属第二病院消化器病センター
三浦 大周 Miura Daishu	虎ノ門病院
白石 憲男 Shiraishi Norio	大分医科大学第一外科
宇山 一朗 Uyama Ichiro	藤田保健衛生大学医学部消化器外科

### プロトンポンプ・インヒビター

指定医薬品

**タケプロン**®  
カプセル15・30  
(ランソプラゾールカプセル)

■ 効能・効果、用法・用量、禁忌・使用上の注意および取扱い上の注意等については、添付文書をご参考ください。

■ 薬価基準: 収載

**Takepron**®

(資料請求先) 武田薬品工業株式会社  
〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

**特別寄稿****第39回  
万国外科学会に参加して**

横浜市大市民総合医療センター・  
消化器病センター外科教授

**今田 敏夫**

私が国際学会に参加し発表したのは、1987年Aarhusで開催された European Society for Surgical Research で、旭川医科大学第二外科の水戸教授に連れて行っていただいたのがはじめてである。国際学会の雰囲気を味わったが、語学力不足のために満足な討論ができなかつたのを覚えている。World Congress of Surgery/ International Surgical Weekは1993年に Hong Kongで開催された第35回に、2演題を発表したのが最初だった。その時に受けた印象から、一年に2回ぐらいは国際学会で研究発表するように心がけようと思ったが、大学病院だけでなくいろいろな関連施設を回りながら修練をしていると、時間の問題などで理想的にはいかなかつた。

今回、8月26日から30日まで5日間、ベルギーのブリュッセルでISS/SICが開催されるということで、今までに私的研究や学会でもベルギーへは訪れたことが無く、是非参加したいと思っていた。

国際学会の楽しみの一つは、その国の歴史や文化に触れることができることと、いろいろな食事を楽しむことができる。ブリュッセルも歴史を感じさせる建物が見事に調和した美しい町であった。学会の合間

を見て街中を積極的に回り、王立美術館や王宮を訪れた。また、8月26日は神奈川県立がんセンター院長の本橋久彦先生の率いるグループに便乗する形で美しい運河の町ブリュッセルにバスで出かけ、ノートルダム寺院のあるアントワープへは列車で出かけ小旅行を楽しんだ。食事は最初、地ビールやムール貝のスープ煮込みを味わっていたが、学会の後半は結局日本食のレストランへ出かけることとなった。

学会は教室関連の演題が3題あったので、27日から30日までシンポジウムや一般演題を広く聞いた。日本からの演題も多かったが、診断や治療方針の違いを広く知ることと語学の勉強も兼ねて、なるだけ外国の演者の発表を中心に聴いた。特に私の専門分野である上部消化器疾患関連では "Sentinel node navigation surgery in gastric cancer" や "Barrett's esophagus" や "Reflux disease"などのシンポジウムは興味深い発表であった。Educational workshopとして、国立がんセンターの丸山圭一先生と J.R.Siewert教授によっておこなわれた "How I do it— Gastric cancer" は多くの外国人医師が参加し活発な討議がなされ、非常に好評であったが、討論の時間が短かったことが唯一残念であった。日本からの発表がポスターのみで、Oral presentationがやや少なかったのはさびしかったが、Oral presentation がおこなわれたものに関しては、流暢な英語で活発な討議がなされ充実していたように思う。

国際学会は、世界中の優れた施設における各疾患に対する診断・治療の考え方や研究に対するアプローチの方法等を直接知る良い機会であると同時に、色々な交流ができる場である。このような伝統のある国際学会に若い先生方が積極的に参加され、活躍の場を世界に広げられることを切に希望している。

**第12回 万国外科学会日本支部議事録**

開催日時: 2001年10月11日AM8:00~9:00

会場: パシフィコ横浜 312会議室

- 開会挨拶 (山川)
  - 第11回支部会議事、支部会活動報告 (村田)
  - 庶務: 会員状況報告 (酒井)
- 2001年10月11日現在  
会員数 278名 (active member 265, senior member 13)  
退会者 8名  
名誉会員 2名

これに関連して、山川支部長より、会費納入状況の報告と、若手医師への入会勧説が要請された。

- 39th World Congress of Surgery/ International Surgical Week 2001報告 (山川、出月、比企)

- International Committee meeting 報告  
(比企、出月)

開催地決定の手順が不透明であるが、International Surgical Week 2001の日本開催にむけ、会員数の増加とactivityの向上が必要であることが確認された。また、日本誘致に向けた積極的な宣伝活動を行うよう提案がされた。

- World Journal of Surgery編集委員会報告 (馬場)

**2000年収支決算書(2001年1月1日~12月31日) 単位:円**

収入の部	予算額	決算額	増減	備考
会費	1,300,000	975,000	△ 325,000	
広告掲載料	200,000	150,000	△ 50,000	
雑収入	0	44,500	44,500	
利息	0	340	340	
当期合計	1,500,000	1,169,840	△ 330,160	
前年繰越金	1,596,676	1,596,676	0	
収入合計	3,096,676	2,766,516	△ 374,660	
支出の部				
会議室	200,000	332,292	△ 132,292	2回分
通信費	300,000	168,890	131,110	
印刷費	500,000	430,080	69,920	ニュースレター: 2号分
文具費	50,000	15,496	34,504	
交通費	50,000	39,300	10,700	事務員出張旅費
人件費	150,000	120,000	30,000	
他誌広告費	100,000	0	100,000	
本部寄付	109,000	109,000	0	
雑費	10,000	12,000	△ 2,000	
予備費	150,000	35,000	115,000	
支出合計	1,619,900	1,262,958	356,942	
收支差額	1,476,776	1,503,558	26,782	
2001年繰越金	1,476,776	1,503,558	26,782	

**2001年 予算案(2001年1月1日~12月31日)**

収入の部	予算額
会費	1,350,000
広告	200,000
前年度 繰越金	1,503,558
収入合計	3,053,558
支出の部	
会議費	200,000 日本支部総会開催 (2回)
通信費	300,000
印刷費	500,000 ニュースレター
文具費	50,000
交通費	50,000 事務員出張旅費
人件費	150,000
他誌広告費	100,000 万国外科学会開催案内
本部寄付	125,000 1,000us\$
雑費	10,000
予備費	150,000
支出合計	1,635,000
当期収支差額	
2002年繰越金	1,418,558

- 急性肺炎
- 慢性再発性肺炎の急性増悪期
- 術後の急性肺炎
- 汎発性血管内血液凝固症(DIC)

**蛋白分解酵素阻害剤 注射用エフオーワイ®**

● 効能・効果 ①蛋白分解酵素(リパブリン, カリクリイン, プラズミン)活性を抑制する止血薬

● 用途・用法 ②出血性疾患の止血

● 注意事項 ③出血性疾患の止血

● 薬理作用 ④蛋白分解酵素活性を阻害する止血薬

● 併用注意 ⑤他の止血薬との併用

● 避免薬 ⑥蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ⑦蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ⑧蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ⑨蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ⑩他の止血薬との併用

● 避免薬 ⑪蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ⑫蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ⑬蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ⑭蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ⑮他の止血薬との併用

● 避免薬 ⑯蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ⑰蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ⑱蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ⑲蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ⑳他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉑蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉒蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉓蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉔蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉕他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉖蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉗蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉘蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉙蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉚他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉛蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉜蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉝蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉞蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 薬理作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 併用注意 ㉟他の止血薬との併用

● 避免薬 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 副作用 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬

● 警戒事項 ㉟蛋白分解酵素活性を阻害する薬